

大阪商業大学学術情報リポジトリ

学習支援における教職協働

—大阪商業大学「楽習アワー」2011～2014年度前期の取り組み—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2015-03-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 信子, HASHIMOTO, Nobuko メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/38

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学習支援における教職協働

—大阪商業大学「^{がくしゅう}楽習アワー」 2011～2014年度前期の取り組み—

橋 本 信 子

はじめに

- 1．本学の学習支援体制の概要
 - 1-1．学修支援センターと学習支援講座の概要
 - 1-2．「楽習アワー」の概要
 - 1-3．「楽習アワー」利用実績
- 2．学習支援を活性化させるポイント
 - 2-1．空間
 - 2-2．人
 - 2-3．つながり
 - 2-3-1．専門基礎科目と学習支援の連携
 - 2-3-2．ゼミナール出張講座
 - 2-3-3．教職課程との企画講座
 - 2-3-4．学習支援－図書館－正課授業の連携
 - 2-3-5．教員向け支援の試み
 - 2-4．仕掛け
- 3．今後の課題

はじめに

本稿は、大阪商業大学（以下、本学）で筆者が企画運営に当たってきた正課外学習支援講座「楽習アワー」の立ち上げから2014年度前期までの実践報告である。

大学は、学生が自主自立して社会に関わっていく力を身につけることを支援する教育機関である。正課授業のカリキュラムは、学生の希望する進路や追求したい分野について体系的に学ぶ機会を提供すると同時に学問分野の多様性を学ぶ機会を提供する。それには基本的な知識や技術の習得、つまり、読み、書き、まとめ、伝える力の習得が欠かせない。それらの力が入学前に充分備わっていれば理想的ではあるがなかなか難しいのが現状であるので、基礎的な学力の向上と、大学での学びを円滑に進めるためのアカデミック・スキルズの習得を促すようなカリキュラムや授業手法の開発が近年盛んになっている。しかし、正課授業には各科目の学習事項と到達目標があるので、基礎学力向上やスキルの習得ばかりに時間を割くわけにはいかない。そこで正課外においても基礎学力を補完し、修学のための力や学生の学

ぶ意欲を高める支援体制を整える動きが広がっている。本稿では、本学の学習支援体制の概要と実践について報告し、学習支援の効果的な運営に欠かせない4つのポイント、空間、人、つながり、仕掛けについて考察する。このうち3年半の実践でもっとも重要と感じた「つながり」、すなわち教職員の連携という観点に特に焦点を当てる。

1. 本学の学習支援体制の概要

学習支援とは、独立行政法人大学評価・学位授与機構の説明によれば、「高等教育機関において、学生が教育課程を効果的に遂行するために整備された総合的な支援体制。履修指導や学生相談、助言体制の整備など¹⁾」を指す。このような学習支援を管轄する部署や施設の名称は大学によってさまざまである。本学では2012年度に教務課から独立して設置された学修支援課と、同課が運営する学修支援センターがそれに当たる。

1-1. 学修支援センターと学習支援講座の概要

本学の学修支援課は「大商大生のための相談総合窓口」として、「教務課・学生生活課・学生相談室・課外活動支援室・キャリアサポート室などと連携をはかり」、「学習計画の立て方・カリキュラムなど学業にかかわる相談、休学・退学などの学籍にかかわる相談に個別対応」する。入学前教育、初年次教育、リメディアル教育、自学自習支援に関するワンストップサービスの窓口として学生を多方面で支援する部署である。

学修支援課が運営する学修支援センターは「基礎学力向上と学習意欲の促進を目的とした施設」であり、「授業での疑問点を解決したい、資格取得に向け、基礎を固めたいなど、学修にかかわることならどんなことでも気軽に相談」できる場である²⁾。その具体的な場として「サポート学習講座」と「^{がくしゅう}楽習アワー」を開設している。「サポート学習講座」は補習講座的な位置づけで、「英語講座」(2008年度～)、「簿記講座」(2009年度～)、「生活数学講座」「パソコン講座」(2012年度～)が開講されている。次項以降では、筆者が中心となって企画運営に当たってきた「楽習アワー」の実践を詳細に報告する。

なお、これらの講座の設置、企画運営、広報等については、学内の「学習サポート委員会」で協議している³⁾。2014年度の委員会の構成員は教員12名(うち講座担当者7名)と学修支援課職員2名である。

1-2. 「楽習アワー」の概要

「楽習アワー」は、本学の「就業力育成支援プロジェクト」の柱の一つとして2011年度に開設された。学生が正課授業についていけるよう支援する時間、学生が学習支援を利用して

1) Weblio 辞書 独立行政法人大学評価・学位授与機構『高等教育質保証用語集』
<http://www.weblio.jp/cat/academic/kkshy> (2014/09/28アクセス)

2) 大阪商業大学公式 HP 内「学修支援センター」
<http://ouc.daishodai.ac.jp/campuslife/support/center/center.html> (2014/09/28アクセス)

3) 学習サポート委員会は、2011年度6回、2012年度5回、2013年度4回、2014年度の前期に2回開催した。

自学自習の習慣をつけるきっかけを提供する時間を意味する愛称である⁴⁾。学生が空き時間に利用できるよう、年々開設時間を拡大し、2014年度前期は2名の専任教員と6名の非常勤

表1．2014年度前期の「楽習アワー」（「ライティング講座」「学習よろず相談」）時間割

	月	火	水	木	金
2時限 10:40～12:10	非常勤講師	非常勤講師2名	専任教員 (「学習よろず相談」)	専任教員 (「学習よろず相談」)	非常勤講師
昼休み 11:30～13:00	非常勤講師	非常勤講師	非常勤講師	非常勤講師	非常勤講師
3時限 13:00～14:30	非常勤講師	非常勤講師		非常勤講師	非常勤講師
4時限 14:40～16:10	非常勤講師			非常勤講師	非常勤講師

講師が月曜から金曜の週17コマを開講した。

「楽習アワー」の柱の一つは、新入生の学習面のフォローである。大学の授業に早くなじみ、自学自習の習慣をつけることを支援する。そのため1年次の前期必修科目「基礎演習Ⅰ」⁵⁾（2014年度からは「ゼミナールⅠA」に科目名を変更）を担当する専任・非常勤教員がシフトを組んで学修支援センター内の専用の部屋に週5日常駐し、欠席者の補習や、個別指導、課題の授受等に当たっている。

「楽習アワー」のもう一つの柱は、全学生を対象とした「ライティング講座」「学習よろず相談」である。授業での案内、誘導に努めているが、正課授業ではないので卒業要件とは無関係である。「ライティング講座」は日本語の文章力向上のための講座である。レポートや論文、レジュメ作成その他、日本語の文章および文書作成全般を支援する。個人またはグループへの個別指導と、テーマを限定した企画講座の2本柱で運営している。個人およびグループへの指導は、学生のニーズやリクエストに合わせて対応する。オフィスアワーや家庭教師的な役割を想定している。日本語力向上のためのオリジナル教材を使った文章指導、正課授業のレポート作成支援、就職活動や公務員受験に向けた小論文指導などでの利用が多い。予約不要で、開室時間内であれば利用時間に制限はない。定期的に通う学生もいれば、1回～数回だけの利用もある。キャリアサポートセンターやクラブ活動を支援する部署などとも連携し、学習相談やライティング指導が必要な学生がいれば随時誘導してもらっている。もう一つの柱である企画講座は、特定のテーマを設定し、講義形式もしくはワークショップ形式で開催するものである。次節で実践例を詳述する。

「学習よろず相談」は2011年度後期に開設した。全学生を対象とし、学習に関するあらゆる相談を受ける。履修や進路など繊細な対応が必要な相談が寄せられる可能性が高いので、筆者ともう一名の専任教員が曜限を限定して対応し、必要に応じて学内の関連部署や教員と

4)「楽」という字は本学の建学の理念（「世に役立つ人物の養成」）を支える4つの柱のうちの一つ、「楽しい生き方」ともかけている。

5)「基礎演習」を履修できなかった学生は、再履修科目「学習リテラシー」を自動的に履修する。この科目も「基礎演習」を担当している専任・非常勤教員が担当している（2011～2014年度）。

連携をはかっている。

「ライティング講座」と「学習よろず相談」は、実際には分けられるものではない。面識のない教員に漠然とした学習相談や進路相談に来る学生はごくわずかで、逆に、初年次演習のフォローやレポート指導、あるいは企画講座で話しているうちに、さまざまな相談をもちかけられることが多い。そのため「楽習アワー」の開設時間内であれば、両者の別は気にせず、予約なしで気軽に訪ねてもらっている。相談内容によっては専任教員や関係部署に引き継ぐなど臨機応変に対応している。「楽習アワー」では、時系列の利用記録（一覧表）と、個人別の指導記録（カルテのようなもの）をとっているが、「ライティング講座」と「学習よろず相談」で記録の区別はしていない。個人記録に対応の内容を記すことで担当者間での情報共有、引き継ぎをはかっている⁶⁾。これまで大学院進学、他大学への学士入学、就職活動、演習科目などに関する相談があり、ほとんどの場合、文章指導や面接試験の指導を並行して行っている。

1-3. 「楽習アワー」利用実績

「楽習アワー」の受講人数は以下の通りである。この数字は、ある程度の時間をかけて学習相談に応じた件数であり、ごく短時間の対応や資料の受け渡しのみといったものは含んで

表2. 「楽習アワー」利用人数

年度	前期（のべ人数）	後期（のべ人数）
2011年度	※6月開設 ⁷⁾	165名
2012年度	200名	245名
2013年度	108名	248名
2014年度	391名	—

いない。学生だけの自習など施設のみの利用も含まない。

次節で後述するが、学修支援センターは2012年春に移設リニューアルオープンした。それ以降の数字を比較すると、「楽習アワー」の利用の多寡の要因が見えてくる。2013年度前期に利用者数が大きく落ち込んでいる。これは意図的なものである。この学期は担当する非常勤講師が減り、前年よりも少ない人数で「基礎演習Ⅰ」の授業と「楽習アワー」を回さなければならなかった⁸⁾。そのため、講座担当者が初年次演習で多忙を極める前期には、あえて企画講座の実施をしなかったのである。そのような状況だったので、各教員も「基礎演習Ⅰ」の授業内でできるだけ指導を完結できるよう努めたことも影響した。後期は、非常勤講師は初年次演習を担当せず「楽習アワー」のみに専念してもらえるので、2012年度同様の活動が可能となった。結果、前年度後期とほぼ同数の利用となった。つまり企画を打ち出して学生を誘導したときと、任意で訪れる学生の個別指導に限ったときとでは、半期で100名以

6) プライバシーに関わる相談内容についてはつまびらかには書かないようにしている。なお、学習支援講座の利用記録は、関係する教職員がいつでも状況を把握できるよう2014年度から学内限定で共有フォルダにデータ入力することになったが、個人別の指導記録に関しては各講座とも紙の記録のみにしている。

7) 2011年度前期は正確な利用者数が確認できなかった。

8) 他大学への就職や、本務校の業務と重なったための辞退に加えて、病気による欠員が重なったためである。

上の利用の差が出たことになる。

もちろん、こうした課外の学習支援は利用が多ければ良いというわけではない。むしろ、本当に支援が必要な学生に必要な支援をするためには、一人ひとりにていねいに対応する時間的余裕と人員が必要である⁹⁾。本学の学習支援講座は予約制や時間制限を採っていないので、長ければ一人に90分をまるまる費やすことも多い。同時に指導できる人数にも限りがある。「楽習アワー」では、教員に時間をずらして担当してもらうことで開講時間を拡大し、学生が使いやすい体制を整えてきた。しかし非常勤講師が担当できる時間数には上限があるので、開講時間を拡大すれば各時間帯の担当者の数は少なくなる。そのため企画講座を開くときには筆者が通常のシフト外に個別指導や企画講座を担当するなどして対応している¹⁰⁾。

2．学習支援を活性化させるポイント

本節では「楽習アワー」の3年半の実践をふりかえり、学習支援を効果的かつ無理なく運営するポイントを整理する。そのポイントとは、ハードとしての空間、運営する人材、関係部署や教職員間のつながり、そして仕掛けである¹¹⁾。このうち学習支援に関わる教職員のつながりの重要性について特に詳細に検討したい。

2-1．空間

物理的な空間が自学自習の雰囲気醸成する効果は大きい。2011年度は「楽習アワー」は教員の研究室が並ぶ研究棟の一画で行われていた。教室棟ではない上に、2階の一番奥の一室のため、学生がふらりと立ち寄ることはまずない。補習として呼び出すか、教員と授業後に一緒に移動することでもなければまず訪れる気にはなれない場所であった。

翌2012年4月、学修支援センターが教室棟（6号館）の1階に移設した。リノベーションを施し、廊下まで取り込んでワンフロアを一体化したオープンな空間に、学修支援課事務室、自習コーナー、グループ学習室（個人利用や授業使用も可能）、サポート学習のための部屋（「楽習アワールーム」）、教員のミーティングルーム（「研究室」）が設けられた。センターは出入り自由で、改札や受付的なものはない。利用時間の制限などもない。センターが開いている時間内であれば短時間でも長時間でも利用できる。居場所・相談相手のなかった学生が頼れる場となることを意識した居心地の良い空間が用意された¹²⁾。

9) 同様の所見は他の講座からも報告されている。なお、「楽習アワー」以外の講座は専任教員1～3名が交替で担当しているので、学生のニーズに合わせた個別指導のスタイルを採っている。英語講座は、2名の教員がそれぞれ個別対応の時間と、連続講座の時間を分担している。

10) 「楽習アワー」以外のサポート学習講座は担当教員の数が少ないため、学生の利用状況を見て学期中でも開講曜限を変更するなどして、教員の負担が増えない範囲でできるかぎり学生のニーズに合った時間帯に開講できるよう工夫している。

11) このポイントは授業においても同じである。橋本（2014）では授業の活性化のポイントについて考察した。

12) センターにはノートパソコン80台が用意されている。センター内は無線LAN環境が整っている。パソコンは学生証を預けて借りる。印刷も可能（枚数制限あり）。レポート作成などの利用が増えている。2012年度（5月から利用開始）は約2800件、2013年度約9000件、2014年度は前期だけで約7000件と利用が急増している。

開設直後こそ自習目的の利用と休憩や時間つぶしが半々の閑散とした雰囲気であったが、徐々に学習目的の利用が増え、2年目には学生が自習をしたりグループで学習をしたりする様子が常に見られるようになった。試験前や、次年度の演習の申し込み時期などは席が足りなくなる盛況ぶりである。学習支援講座も2012年度から学修支援センター内の「楽習アワー」や「研究室」で開講している¹³⁾。

センター全体の利用人数は、学修支援課職員が1日4回目視で計測している。施設利用者は平成24年度が約6000名、平成25年度は約12000名である¹⁴⁾。「楽習アワー」の利用も、2012年度、大幅に増えた。センターの上階には普通教室や情報処理室があり、学生の出入りが多い。施設の位置や空間が利用の促進に大きく影響することを実感している。

2-2. 人

本学の学習支援講座の担当者はすべて教員である。これは本学の学習支援の最大の特徴であり、強みであると考える。担当教員は「学習サポート委員会」の場で、講座ごとの利用状況や課題、今後の方針、展開等について報告、議論するほか、平常も折に触れて情報交換、意見交換している。

「楽習アワー」は、専任教員2名に加え、非常勤講師も担当している。年度によってメンバー、人数は多少変動するが、非常勤講師は毎年7名ほどである。その全員が大学院博士課程に3年以上在籍した研究者で、「基礎演習Ⅰ」の一部期間(4～6月のアカデミック・スキルズを学習する期間)を担当している。「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」(「Ⅱ」は1年生後期の必修科目で専任教員のみが担当)の再履修者向け科目である「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」や、教職課程の講義科目を担当している講師もいる。これらの正課授業を受け持つことで、本学学生の気質や授業での様子、学力を肌で実感してもらえることの効果は大きい。しかも「基礎演習Ⅰ」は全学共通のシラバスとテキストに則って授業をしているので、自分の担当クラスの学生以外の対応もスムーズに行える。そのようなスキルと汎用力のある教員には学生も相談しやすい。教員にとっても、初年次に指導した学生のその後の成長を「楽習アワー」で見ることができることがやりがいにつながっている。そうして学習支援で得た所見や課題は次の正課授業に活かされる。このような循環が生まれることで非常勤の教員にも積極的に教材開発や企画講座の構想、広報「楽習アワーだより」作成に関わってもらうことができている。このように授業を担当する教員が課外講座を担当しているメリットは大きい。

「楽習アワー」は担当者と開講時間数が多いため、担当者が一同に会することは難しい。そこで対面でのミーティング、指導記録や業務日誌、メールなどで密に連絡をとりあっている。業務日誌はフォーマットに入力し、打ち出してファイリングして担当者全員が出講時に確認している。さらに終業時に筆者に日誌のデータをメール送信してもらっている。筆者はこれを同日中に即時確認し、随時必要な手配や連絡をしてきた。

「楽習アワー」は2014年度で4年目に入った。つまり「楽習アワー」の担当者は全学年の

13) 英語と簿記の講座はセンター移設前の教室で開講している。

14) 各講座の利用状況については、2013年度までは学習サポート委員会を担当教員がそれぞれ受講者数と指導内容、所見を報告していたが、2014年度からは学内サーバーの共有フォルダ内に共通の書式で受講者数を入力する方式になった。これによって教職員が随時、利用状況を把握できるようになった。

初年次演習を受け持ったことになる。3年目の2013年度以降、学習支援体制の存在と役割が学内に浸透し、学生の口コミや教員のよびかけで講座を利用する学生が増えている。担当者からも、かつての受け持ち学生が声をかけてくれる頻度が増した、訪ねてきてくれたとの報告を受けている。目に見える成果も現れている。開設初年度に足繁く通ってくれた学生は3年生になって成績優秀者として表彰され、その表彰式のスピーチでライティング講座受講の効果を宣伝してくれた。別の学生は、ライティング講座での小論文指導のおかげで警視庁に採用されたと報告に来てくれた。本学では取得できない免許を取るべく他大学の大学院を受験するために文章指導を受けた学生も見事合格した。講座が卒業論文作成におおいに役立ったので就職までにさらに文章力を向上させたいと訪れる学生、講座オリジナル教材で自分の弱点を自覚したので、それを克服すべく学外の検定を受検してみると話す学生など、嬉しい報告が相次いでいる。

2-3. つながり ―連携による学習支援の実践

課外の学習支援は正課授業とは違い、強制力がない。そのため、施設利用の点では繁盛している大学でも、学習支援講座の利用はそこまでの利用がなく学生のニーズがくみ上げられない、ターゲットにする層をしばりづらい、または来て欲しい層が来てくれず身につけて欲しいスキルがつかないままになっている、そのため支援の効果が測りづらい、といった課題を抱えることになる。

単に利用者数を伸ばすのであれば、例えば多人数科目で課外講座の受講を義務づければ達成可能ではあるが、それは「学生の自学自習を促す」「学習意欲を喚起する」という設置目的とは合致しない。また、そのような大人数が一度に押し寄せてもていねいな対応は不可能である。本学の学習支援担当の教員間では、無理に動員をかけて利用者数を増やすよりも、むしろ少人数で学生の学習上の悩みに細やかに対応したい、していくべきであるという意見で一致している。

とはいえ、支援が必要な層に利用を促すこと、学生や教員のニーズをくみ取る努力は必要である。それには、教員間、教職員間の連携が何より大切であると考ええる。また、おそらくそれは課外学習支援講座を活性化する最も有効な策になるのではないかと考えている。そこで、以下では、教職員の連携・協働による学習支援・授業支援の実践例を詳述する。

2-3-1. 専門基礎科目と学習支援の連携

正課授業と学習支援講座の連携は学習効果を上げるのに有効である。2011年度後期に経済学の専門基礎科目の担当教員と相談し、ライティング講座で「ノートの取り方」にポイントをしばった講座を開いたところ、受講した学生の同科目の小テストの結果が軒並み改善したことは橋本（2013）で報告したとおりである。その後、この講座の内容を2012年度の「基礎演習Ⅰ」の初期に組み込むことを学内の初年次教育委員会に提案したところ承認され、2012年度からは「授業の受け方 ノートの取り方」として「基礎演習Ⅰ」の第2回授業に盛り込まれた（第1回目は学外研修）。授業モデルとレジュメ見本は筆者から提供しているが、授業では各教員がそれぞれに工夫やアレンジを加えて実施していると聞いている。授業と学習支援講座のコラボレーションが別の正課授業にも反映された例である。

2-3-2. ゼミナール出張講座

「ライティング講座」は正課授業への出前講座もしている。2012年度から3年連続で、2年次演習の授業の1回を使ってライティングの基礎講座を開催した¹⁵⁾。このような1回完結の講座向けにはこれまでに2つの基本プログラムをつくり、高大接続講座やオープンキャンパスでのミニ体験講座でも利用し、通常の「ライティング講座」で他の教員にも使ってもらっている。プログラムの一つは、子どもが書きがちな作文を題材に、大学生らしい文章はどういうものかを考える「遠足作文編¹⁶⁾」、もう一つは2つの文章を比較して大学生のレポートにふさわしい文の特徴を読みとるパターン¹⁷⁾である。いずれも、90分あるいはもう少し短い時間で、文章の読み取りと確認、教員による解説を行い、当該講座で学んだことを400字程度の文章にまとめるというプログラムである。

2年次演習への出前講座では、回収した作文を後日添削し、講評を添えて、演習担当教員を通じて学生に返却している。出前とは書いたが、演習担当教員と相談し、講座の時には学修支援センター内の「楽習アワールーム」に来てもらい、普段と違う教室でほどよい緊張感を持って臨んでもらっている。これは学修支援センターと「ライティング講座」の周知も兼ねている。

上記の2つのプログラムや上述の「ノートの取り方」のように、身につけてほしいスキルについてミニ講義を行い、そこで学んだことを文章化するという方法は、短い時間で学習効果の得やすい方法である。学んだばかりのことなので書く内容が浮かばないということがなく、教員が作ったミニ講座の構成に沿って書けば良いので自然と筋の通った文章が書ける。学習内容が整理できて、それが文章として残る。教員の側も学生が講座で学んだことを理解しているか、自分の言葉で再現できているかを確認できる。効率も効果も高い方法である。このパターンは次項の企画講座「板書のコツ」を板書しよう」でも応用している。

2-3-3. 教職課程との企画講座

2011年度の開設当初から「ライティング講座」は教務課と協働で教職課程の学生向け講座を企画・運営してきた。2011年前期の初めての企画講座においても、教職科目¹⁸⁾の担当教員と教職課程担当職員・奥村真紀子氏の協力で、正課授業内で講座の案内、誘導をしてもらうことができ、のべ37名が受講した。後期には、同氏と協働で「介護等体験実習感想文講座」も企画、運営した¹⁹⁾。

2012年度前期には、奥村氏の発案を基に教育実習生向けの企画講座を開いた。「教育実習日誌書き方指導」を受けたのち、「コミュニケーション力と自分になりたいと思う教師像について」というテーマで小レポートを書き、添削指導を受けるというものである。受講した

15) 正木幸子教授の2年次演習「演習Ⅰ」。

16) 「遠足の思い出」という設定の作文をオリジナルで作成し、その特徴を読みとり、どうすれば良い文章になるかを考える教材。小学生が遠足の一日を行動した順に羅列したという設定で、かなりデフォルメしたものにしている。話題をしぼる、テーマに直接関連することはいいに書く、自分にしか書けないことを書くといったところを読み取らせる。

17) 学習技術研究会編(2006)103-104頁、または筆者オリジナルの文章を使っている。

18) 佐野茂教授担当の「教育課程・特別活動論」(2年次生対象科目、94名が登録)。

19) 初年度(2011年度)の2つの企画講座については、橋本(2013)で詳しく報告した。

学生の一部は実習後、受け入れ校への礼状の書き方を指導してほしいと再訪してくれた。

2013年度は、前述の通り講座担当者の人数減のため前期の企画講座は実施しなかったが、後期には宮坂朋幸准教授の担当する「教育思想史」の小レポートの事前指導を請け負った。構成、体裁、言葉づかいなどがレポートの条件に合致しているかを「ライティング講座」でチェックし、修正を助言する。それを直した上で宮坂准教授に提出するという流れである。

このときに散見されたのは、「お題」の条件に合った構成を立てられていなかったり、文章作成の基本を守れていなかったりする学生が少なからずいるという事実であった。レポートの設問に、「テキストを読んで印象に残った点を具体的に挙げ、それについてどう考えたかを書くこと」と明記されているのに人物の略歴紹介に終わっていたり、段落を設けていなかったり、字数その他の条件を守れていなかったり、日本語がおかしかったりする学生が少なからずいたのである。

こうしたことは文章作成の基本中の基本で、1年生前期の「基礎演習Ⅰ」でも当然指導している。同科目のタイトなスケジュールで文章作成指導に割けるのは4コマ1課題であるが、その課題に関しては構成、体裁、文章とも整ったものに仕上げさせている。しかし、その後文章作成の機会があったと見られる学生と、一度きりで身に付いていないと見られる学生とでは、相当な差が生じることを実感することとなった。「ライティング講座」の担当者は「基礎演習Ⅰ」の担当者でもあるので、このような状況に達成感とともに危機感を抱いた。そのため教職科目「生徒指導論²⁰⁾」も担当する和田充弘・榎本恵理非常勤講師は、同科目の授業内で「ライティング講座」の利用を強く推奨し、多くの学生を講座に誘導している。その効果で、同科目の受講生たちが講座のオリジナル教材²¹⁾を用いて日本語の基礎力向上に努めた。なかには足繁く通って新しい教材開発のモニターの役割を果たしてくれる学生も現れた。

2014年度前期には、教職課程と「ライティング講座」のコラボレーションを復活させ、「板書のコツ！ワンポイント講座」を開催した。企画に当たって、教職課程委員会委員長である佐野茂教授に、学生に具体的に何を身につけてほしいかを尋ねたところ、「まずは筆順を意識するところから」という発言を得た。板書計画については教育実習の授業内でも指導するが、正課授業では内容や構成の指導がメインで、「人に見られる字を書くこと」そのものの指導にそうそう時間は避けない。しかし板書は生徒の実習生への信頼や評価に大きく影響するのである。

そこで「ライティング講座」では3パターンの板書講座を用意した。「A．筆順の原則」は「ライティング講座」の開室時であれば一人から予約不要で受講可能、「B．きれいで読みやすい字を書こう」は普通教室の黒板を使うため要予約とした。「C．“板書のコツ”を板書しよう」は複数名の予約で開講成立とした²²⁾。佐野教授の「教育課程・特別活動論」（3・4年生対象科目）に加え、宮坂准教授の「教師論」（主に1年生対象のリレー科目）

20) 両氏は「基礎演習Ⅰ」と「ライティング講座」も担当、オリジナル教材開発にも当たっている。榎本講師は「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」も担当している。

21) 「ライティング講座」では、オリジナルの教材を開発している。その主力が「よくあるまちがい直ししよう」シリーズで、これは「基礎演習」などの課題で散見される日本語のまちがいを収集した完全なオリジナル教材である。詳しくは橋本(2013)を参照されたい。

22) 3つの講座は、樋口、青山(2013)を参考に構成した。

図 「板書のコツ！ ワンポイント講座」アンケート結果

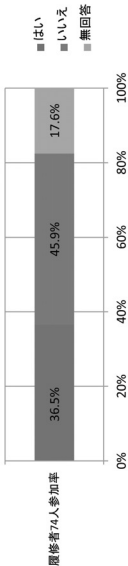
2014年フライング講座特別企画

板書のコツ！ワンポイント講座 アンケート集計

配 付 日：2014年6月26日
回答対象者：木曜5限「教育課程・特別活動論」（佐野先生授業内にて配付）
研修者数：74人
回答人数：61人

1. ワンポイント講座（5月19日～6月13日）に参加しましたか？

	はい	いいえ	無回答
(人)	27	34	13
(%)	36.5	45.9	17.6



2. 1で「はい」と答えた方に質問します。
講座を受けた感想について、参加した講座の該当するものに丸をしてください。

A 筆順の原則	
満足	どちらでもない
16	2
B きれいで読みやすい字を書こう	
満足	どちらでもない
14	2
C 板書のコツを板書しよう	
満足	どちらでもない
15	0

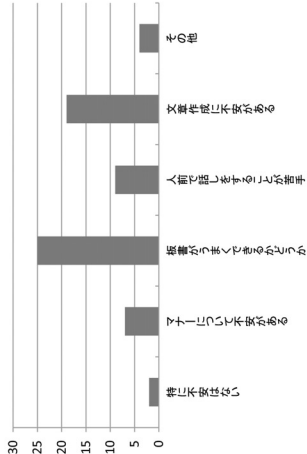
3. 1で「いいえ」と答えた方に質問します。
参加しなかった理由を教えてください。当ではまるものに丸をしてください。（複数回答可）

時間に余裕がなかった	必要性を感じなかった	申込みを忘れていた	その他
25	1	13	2

※その他意見・・・とても行きたかったが時間がなかった、2年生のためまだ必要ないと感じた

4. 4年生で教育実習に参加するにあたり、不安に感じていることがあれば、当てはまるものに丸をして下さい。

(複数回答可)			
特に不安はない	マナーについて不安がある	板書がうまくできるかどうか	人前で話しをするのが苦手
2	7	25	9



※その他意見・・・生徒との関わり方、学習指導案の作成、授業の進め方、

5 これから教員を目指すうえで授業以外で実施を希望する企画があれば自由に記述して下さい。

希望企画項目	回答件数
教育実習以外で現場で学べる機会を設けて欲しい。	1
板書のコツを知りたい。	7
板書の練習がしたい。	3
文章をうまく書く練習。	4
指導案、企画書の書き方講座	1
字がきれいになりたい。	1
模擬授業の練習	1
授業の進め方	2
教員採用試験の内容を知りたい。	1
教員採用試験の対策講座	1
パソコンを使った授業方法（ICT教育に関する勉強会）	1
現役教師の話を聞きたい。	1
小学校や中学校でのボランティア	1
実習先での立ち振る舞いの仕方	1
コミュニケーション向上に関する講座	1

でも案内してもらった。教務課の教職課程担当職員である吉川末理氏とは構想段階から相談を重ね、教室手配、学生への告知、予約のとりまとめ、アンケートの集計などを分担していただいた。まさに教職員協働の企画となった。同講座は5月19日から6月13日に開催し、のべ81名が受講した²³⁾。アンケート結果を見ると受講者のほぼ全員が講座の内容に満足してくれている（図1）。

「C.“板書のコツ”を板書しよう」ではグループワークを採用した。2011年度後期の「介護等体験実習感想文講座」で、グループでテーマについて深く考えると、そのテーマについての文章の質が向上することを確認したからである。こうした能動的な学習時間を共有すると担当者への親近感や信頼感も高まるようで、グループワークに参加した学生は後々も学内で挨拶を交わしたり、再訪したりする割合がほかの学生よりも高い。

そこで講座Cは、講座の目標を「高校生に向けて板書のコツのミニ講義をする」と設定した。数名のグループで板書のコツを付箋に書き挙げていき、それらを分類整理し、教室のホワイトボードに板書するという構成である。考え、分類し、筋道を立てて一つの形にするという流れは、まさに板書計画ひいては授業計画を体験するものである。これまでに彼ら自身が受けてきた授業の様子を思い起こし、学生同士で話しあって、どうすればわかりやすい授業にできるかを考えてもらう。どの学生もこれまでに体験してきたことなので、学年に関係なく意見を出し合いやすい。それでもやはり上回生が話し合いをリードする様子が見てとれ、頼もしく感じた。講座Cは協働作業を通して教職課程を取る仲間どうしのつながりを広げることも強く意図していたが、ねらい通り受講生は学年を越えて打ち解け、講座のあとも教職の話などでおおいに盛り上がった。同じ目標をもつ学生同士で知己を得ることは教職課程を続けていくうえでプラスになるだろう。こうした場を提供できるのも柔軟性のある学習支援講座ならではの手応えを感じている。

2-3-4. 学習支援—図書館—正課授業の連携

「楽習アワー」は学内のさまざまな部署と連携しているが、とりわけ結びつきが強いのは図書館である。近年、図書館内のラーニング・コモンズが学習支援を行う大学も多いが、本学ではラーニング・コモンズの空間は学修支援センター、図書館は一人で静かに自習する場所という機能分担になっている。大学生らしい学びを支援するには図書館との連携は欠かせないが、本学の場合、両施設は場所的にも離れているので、意識して協働体制を作るよう努めてきた。

図書館側では「サポート学習講座」「楽習アワー」のおすすめ本を集めたコーナーを設けている。「楽習アワー」からは後述の広報チラシ「楽習アワーだより」を毎号届け、掲示してもらっている。「楽習アワーだより」では4月発行の号で初年次演習の書評作成プログラム「おすすめの一冊」（5月に実施）で取り上げる本を選びに図書館に行くことを呼びかけ、全クラスで配布する。「おすすめの一冊」の人気ランキングは夏休み明けの「楽習アワーだより」に読書の秋特集として掲載し、再び図書館利用を促す。「おすすめの一冊」の

23) 講座A32人、B29人、C20人。佐野教授の「教育課程・特別活動論」では少なくとも2講座を受講するよう促してもらったので、大半の学生は複数の講座を受講した。

全リストは図書館にも提供し、図書館はこのデータを用いて、秋の読書週間に「おすすめのー冊」特集コーナーをつくる。展示には学生の書評の一部を提供し、それらを編集したポップを作ってもらっている。この連携が2012年度から続いている。

2-3-5. 教員向け支援の試み

学習支援は直接学生に指導・助言することが第一義であるが、教育面で教員を支援することも効果的かつ必要な活動である。そこで、教材や授業手法の開発と発信によって、「楽習アワー」の拠点である学修支援センターの「研究室」が教員への支援と教員間の交流の場となるよう努めてきた。書籍、各種辞書、新聞、電子辞書、文房具セット、高速スキャナ、オリジナル教材を揃え、「楽習アワー」担当以外の教員に貸し出したり利用に供したりしている。

2013年9月には、後期開始直前に教員から演習科目に関する相談を受けたことをきっかけにワークショップを開催した。広報の期間がほとんどなかったにもかかわらず専任教員4名、非常勤講師1名が即応し、実施に至った。新聞をまわしよみ、気に入った記事を切り抜いて順に紹介しあい、画用紙に貼り付けて一枚の壁新聞に編集する「まわしよみ新聞」という「メディア遊び」である²⁴⁾。ワークショップでの完成品はセンターの研究室に貼り出し、見本として貸し出した。さっそく授業に取り入れた教員からは授業の進捗や学生の反応について報告を受け、完成品を見本として借り受けた。それを参考に別の教員がアレンジして授業に取り入れるという良い循環が起こっている²⁵⁾。教員との個別の相談や情報交換はそれまでも随時行っていたが、教員同士の交流や授業改善の動きを活発にするような働きかけを打ち出していくことは大変刺激的で有効であると確信したので、2014年度後期にも教員が交流、協働できる企画を準備している。

2-4. 仕掛け

能力と熱意を兼ね備えた教員を揃え、学生に合った教材やプログラムを用意していても、待っているだけではこうした課外講座の利用はなかなか伸びない。そこで開設の2年目からは、教員・学生に向けた広報として「楽習アワーだより」を発行している。「楽習アワー」の存在がまだ浸透していなかった2012～13年度は、長期休暇期間を除いてほぼ毎月発行した。A4版両面程度に開講案内や活動報告、図書館への誘導、「おすすめのー冊」の紹介などを掲載している。学修支援センターや図書館への設置、授業での配布、学内の掲示板への掲示のほか、学内のインフォメーションシステムや大学HPにアップロードするなどしている。

また、学生が気軽に講座の担当教員と言葉を交わすための仕掛けとして、「楽習アワー文庫」もつくった。「おすすめのー冊」でとりあげられた人気作品を中心にした小さな図書コーナーである。ブックワゴン2台に配架し、「楽習アワー」の時間にはセンターの廊下に出して、通りすがりに自由に手に取れるようにしている。借りるときは「楽習アワー」の教

24) 陸奥賢氏考案。 <http://www.mawashiyomishinbun.info/> ワークショップの様子と完成品の写真を橋本(2014a)に掲載している。

25) 完成品の一部は「楽習アワー」で保管し、閲覧に供している。

員に声をかけて貸出ノートに記録するだけである。貸出冊数はまだ少ないが漸増傾向にある。廊下に置いたブックワゴンの本を学生が眺めている姿はしばしば目撃している。自分が「おすすめの一冊」で読んだ本を見つけて喜ぶ学生がいたり、教員がいまどきの学生に人気の本に触れるきっかけになったりしている。

3．今後の課題

以上、本学の学習支援体制の柱の一つである「楽習アワー」の開設3年半の実践について報告した。「楽習アワー」では、研究者としての訓練を積んだ教員が密に連携し、本学学生に合った教材を開発し、レベルの高い学習支援を提供してきた。担当者はみな正課授業も受け持ち、学生の学力や授業の様子を熟知している。そのような教員が継続して指導に当たってきたことで学生と教職員の信頼を着実に得てきた。利用者の伸びはゆるやかではあるが、上回生となった学生の自主的な再訪が増えていることから担当教員たちはそれを実感している。教職員との協働事業が継続していることも「楽習アワー」への信頼の現れと受け止めている。

強制力のない正課外の学習支援を活発化させるのに効果的なのは、まさにそのような信頼関係を積み上げることである。教職員間に友好的な空気をつくり、有意義な情報交換、相互支援を進めることが、学生への学習支援と教員の授業改善につながるのである。本学の学習支援はまだまだ緒に就いたばかりで、今後はさらなる協働事業を積極的に展開、継続していくことが必要である。本学のように規模が小さい（専任教員数100名前後、学生総数が約5000名）単科大学は、教員同士の交流や情報交換を進めるという点では大規模大学よりは有利であろう。ただし学習支援に相当の比重を置ける専任教員の存在は不可欠である²⁶⁾。これまでの「楽習アワー」はゼロから信頼関係を構築しながら協働で活動を創り出してきた。それは多分に個人的なつながりに依るところが大きかったが、今後は担当者が交代してもこれまで同様、さらにはそれ以上の取り組みを継続できる体制をつくることが課題である。それによって本学の学習支援の場が、学生と教職員の知的交流を生み出す場として発展していくことが望まれる。

学習支援参考文献

- 井上真琴（2013）「「インフォプロ」の自己トレーニングを考える」情報の科学と技術63巻4号
 学習技術研究会編（2006）『知へのステップ 改訂版』くろしお出版
 久保山健（2013）「図書館スタッフによる学習支援の実践：「プレゼン入門 話す基本技術」」大阪大学高等教育研究1

26) 橋本他（2012）p.324では、学習支援担当部署と学生、教職員を繋げる仕組みを考案したり、学習者を支援したりする学習支援専門員の育成を学習支援体制の重要な課題として挙げている。また同志社大学学習支援・教育開発センターの井上（2013）は、図書館職員のように情報を扱う「インフォプロ」に対して、滝本哲史、鷺田清一らの言葉を引いて、専門的知識や技術、経験を持ち、横断的・鳥瞰的な視野に立ってクライアントのニーズを読みとれるプロフェSSIONALになれと説く。これは学習支援を担当するスタッフにも通じると考える。

- 杉谷祐美子 (2013) 「レポート・ライティング指導と学習支援」 館灯52号
- 椿本弥生、大塚裕子、高橋理沙、美馬のゆり (2012) 「大学生を中心とした持続可能な学習支援組織の構築とピア・チュータリング実践」 日本教育工学会論文誌36(3)
- 長澤多代 (2013) 「大学図書館が実施する学習支援・教育支援サービス：北米の事例から見えるもの」 東海地区大学図書館協議会誌 58
- 永見誠二、荒木和彦、菅波昌広、田中泉 (2013) 「摂南大学における学習支援センターの活動 摂南大学におけるリメディアル教育」 工学教育研究講演会講演論文集 平成25年度⁽⁶¹⁾
- 日本リメディアル教育学会監修 (2012) 『大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題』 ナカニシヤ出版
- 橋本信子 (2013) 「大阪商業大学「ライティング講座」の成果と課題」 大阪商業大学論集168号
- 橋本信子 (2014a) 「アカデミック・スキル科目における主体性の引き出し方の工夫 「基礎演習Ⅱ」「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」における取り組み」 『平成24～25年度大阪商業大学教育活動奨励助成費報告書』
- 橋本信子 (2014b) 「学生の知的好奇心を引き出す授業実践 大阪商業大学における「おすすめ」を紹介するプログラム」 大阪商業大学論集174号
- 樋口咲子、青山由紀 (2013) 『板書 きれいで読みやすい字を書くコツ』 ナツメ社
- 和田渡、山本泰三、隅田悦子 (2013) 「阪南大学学習支援室の活動と今後の展望」 阪南論集．人文・自然科学編 49(1)